

空間形成のホリスティック・モデル

谷 誉志雄

1. はじめに

この論説では、クリストファ・アレグザンダー (Christopher Alexander 1936 -) の THE PHENOMENON OF LIFE (THE NATURE OF ORDER: BOOK ONE, 2003) で提案されている、形成論に関わるいくつかの基本概念を検討することを主たる手がかりとしながら、「空間形成のホリスティック・モデル」の成立根拠と可能性について考察してみたい。

アレグザンダーのよく知られている初期の著作、NOTES ON THE SYNTHESIS OF FORM, 1964は、20世紀前半のモダン・デザインが、世界各地の日常的風景として一般化していったことともない意識されるようになってきた環境形成の諸問題を乗り越えようとする、60年代の知的気風を先鋭に表現している。これ以降、多産なアレグザンダーの著作群のなかで、THE TIMELESS WAY OF BUILDING, 1979を理論展開の次のかなめ、あるいは結実のステップとみることができる。建築家、教育者、造形研究者として、アレグザンダーが辿った、そこからさらに20数年の経験と研究成果が、2000ページ近い4部作となる予定のTHE NATURE OF ORDERにまとめられるものと予想される。この最近の成果に至るアレグザンダーの理論の方向をひと言で集約するなら、環境形成と建築をはじめとする、そして色々な造形分野の全般を含む、人間が空間を形成する活動のホリスティック・モデル (holistic model) を「新たな科学的体系」として、そして同時に形成活動と形成者育成の実践的指針として、構築することにある。

この試論の目的は、アレグザンダーが空間形成論において科学的転換と予測している思想展開に認められる、「存在論的な」側面の可能性を探ることである。つまり、空間形成の素材としての「存在するもの」に対して言葉が示している多重性と、空間形成を効果させる「媒体：

agent」である人間が、「存在するもの」を規定している言葉のスタイルに働きかけられ、言葉に誘導されるように空間形成効果を生み出す現象の根底にある構造的な脈絡の一端を明らかにする試みである。

2. ホリスティック・モデルの概要

2.1. 空間のホリスティックな変異

アレグザンダーが考えようとしている空間形成論のアウトラインを理解するためには、空間に発生するホリスティックな変異、ないしは変化、という現象を、先ず注意して観察し、検討しておかなくてはならない。ここで言う空間とは、わたしたちの現象世界にほかならないような日常的空間のことである。すなわち、わたしたちが見たり感じたりすることができ、形姿あるものや感性を動かす事象と出会い、諸物と共生している現象学的自然の器胎のような空間である。人間の形成活動、つまり生産、建築、色々な造形は、この空間に回帰するように施され、この空間を媒体としてわたしたちを感じる世界を養成し、絶え間なく変異させている。

このような空間がホリスティックに変異するであろうことは、おそらくわたしたちの平常な経験のなかでいつでも観察が可能な現象であろう。しかし、その変異現象があまりに「あたりまえすぎる」という理由で、言い換えればその変異現象を表現する言葉が惰性化してしまっていて、思考を素通りしてしまうという理由で、平均的な観察者にとって、空間のホリスティックな変異は、注意深い観察と反省を逃れてしまっているのである。この観察の盲点をよりいっそう決定的にしているのが、近代化とともに大衆的レベルで沈着してしまった機械論的な科学哲学であろう。つまり、空間のホリスティックな変異は、物理的な方法で観測したり計測したりすることができないのである。



図1 花とガードレール

【図1】は、どこにでも見られるような風景を写した写真である。路肩の露出した地面に種が落ちたのだろうか、ガードレールにまとわるように、花が自生し、意気さかんに咲いている。舗装道路とガードレール、その背後にある工場のブロック壁など無機質な人工物でできた環境のなかに花や植物が「在る」と「無い」のとは、その空間のホリスティック・ポテンシャルと呼べる何かが明らかに変化する現象を「見る」ことができる。殺風景な部屋のなかに無造作にでも花を飾れば、部屋全体が温かくなり、安らぐのは当然のことだと多くの人が考える。だが問題は、このように簡単に観察できる（そして、おそらく多数の観察者の観察結果が一致する）現象である空間のホリスティックな変異を、「空間に起こる物理学的現象」として捉え直すことが可能なのかという観点である。たいていの場合、このような現象は、感覚的な関心、せいぜい心理学的か芸術的な関心として済まされてしまう。それらの関心よりも根本的なレベルで、空間構造そのものの探究と理解には結びつけられようとはされないのである。

アレグザンダーが考えようとしている「新しい物理学」の要点は、ホリスティックな空間に生じるポテンシャルの変異を、「場 (field) の変化」として表現できるような数理的方法を発見することから導かれる体系であるように思われる。たとえば、「部屋に花を飾る」という行

為から発生する場の変数は、その部屋のホリスティック・ポテンシャルを増加させると仮定することができ、その部屋を「より好ましい空間」に変異させる「物理学的根拠」となり得るといふ発想である。そのような場の構造を一般的に表現することのできる数学を発明することができれば、建築や造形において「好ましい空間」を形成するうえでの確固とした根拠となり、また実践的な形成プロセスの基盤となるだろうというわけである。

アレグザンダーの研究には、初期の著作にも萌芽が認められる独特な発想のスタイルがある。研究の核心には、空間の「美的構造」を探究しようとする関心がある。つまりそこから建築ならびに空間諸造形の実践的根拠となる基幹的理論を構築しようというのである。しかし、この実際的な空間形成への関心と重ね合わせるように、その空間構造を「数学的」に把握しようとする関心が、彼の研究姿勢の根底に常に垣間見える動機となっている。アレグザンダーは、ケンブリッジ大学で数学を学んでおり、この資質が彼の空間論の発想スタイルに反映していると考えられる。THE NATURE OF ORDER, BOOK ONEの巻末appendixでは、電子波の2重スリット実験を引き合いに出して、ホリスティックな空間が具有するであろうと彼が予見している数理的イメージを、量子力学との比較で素描しようとしている。

THE NATURE OF ORDERは、基本的には建築を中心に据えた空間形成の研究書である。しかもそこには、空間の新しい「物理学」の方向を提起するという意欲的な企画が同時に含まれているのである。その意味でも、この4部作はアレグザンダーの思想的結実を見せる力作であり、ユニークで重要な成果を示している。だがその反面、物理学の解釈問題に片足を踏み込みそうな印象を与えることで、空間の美的構造の「客観的根拠」を飛躍した思想で先取りしようとしているのではないかという不安と懐疑を払拭できない一面が見られることも否定できない。

2.2. 方法としての存在論的エレメントの二重性

この論説で試みるのは、THE NATURE OF ORDERの底流に潜在している志向としての「新しい物理学」あるいは「新しい空間の数理的表現」という思想的成分を「存在論のスタイル」として読み替えられないかという作業である。THE NATURE OF ORDERは数学書ではなく、アレグザンダーが長年にわたって蓄積してきた実践的知見と思想的成熟を整理し、これまでの著作以上に丁寧に述べた形成論の研究書である。豊富な実例を示す、建築、工芸、自然形態などの写真と図を活用した説明は難解ではないが、その一方で、原子物理学や量子力学で語られるようなスケールの空間と、日常的経験にほかならない感性的空間とのアナロジーがところどころで披露されている。スケールが隔絶した両極の空間を、はじめから統一的思考の脈絡で革新しようとする研究者の意思が戸惑いを覚えさせるのも事実である。

標準的な物理的諸科学は、空間の構造要素を物質的な存在者の脈絡に収斂させることで、精密でメカニカルな世界のイメージを築き上げている。物質的脈絡によって成り立つ空間構造の微細な把握が現代テクノロジーの基盤となっており、空間形成に対しても大きなインパクトと恩恵をもたらしているように思われている。現代において標準となっている、このような物質的な空間構造のイメージに本質的な弱点があるとすれば、それは「わたし」を空間に確実に定位させることが原理的に困難になってしまうという根本問題にほかならないだろう。「我」と

はいかなる存在者で、「ここ」であるところの空間で何を行っているのか。物質的な空間構造のイメージは、「我」を空間に含まれる「個別的要素」として、身体と脳の物質的過程に還元してしまいかねないだろう。最も原初的で自明な経験であるはずの「我と空間」の一体化した所与構造を、難解で錯綜した物質的機能によってしか説明されないような空間構造の深淵の彼方に乖離させてしまうのである。

アレグザンダーが志向しているような物理学としての空間の革新ないしは拡張を「存在論のスタイル」へと読み替えるときに、シンプルかつ効果的な方法となるのは、「存在論的エレメント」という発想の仕方である。ここでエレメントというのは、「存在するもの」がどのような素材あるいは「生地：*étouffe, fabric*」からできているのかを表現する包括的なカテゴリーのことである。したがって、物質も存在論的エレメントのひとつのタイプにほかならず、物質の構造と相互作用関係の認識体系（たとえば物理学）は、それが認識対象としているエレメントの特性に由来し、それと整合する存在論のスタイルをもつことになる。先進的な現代文化は、ややもすれば「物質」を唯一の、少なくとも支配的なエレメントと考える存在論を信奉する傾向が認められる。このような文化では、空間形成の素材でもあるエレメントとその形象化、構造化のロジックが、物質を中心とした存在論のスタイルによって強力に誘導されることになる。ホリスティックな空間までを含める物理学の拡張というアレグザンダーの発想を、「存在論のスタイルで読み替える」という作業とは、物質を中心とする存在論的エレメントに、ホリスティックな空間の形成効果（*formative effect*）がよりスムーズに達成できるようなロジックを織り込んだ「異なるタイプの存在論的エレメント」を重ねることで、複合的な存在論のスタイルを考案するということである。

物質的な諸現象の一元論として認識されるような存在論のスタイルでは、空間構造の変異としてのホリスティック・ポテンシャルを「測定する」ことが原理的に困難となっている。同様に、物質であるところのエレメントから構成さ

れる空間は、「我」をその空間の根元的な属性として定位させることが難問題となる。そこでは「我」は、物質自体の複雑な機能の束として、物質のますます微細化される迷路に消失してしまいかねないのである。この状況に対比して、確実に「我」が「その空間の属性」であると言えることと、ホリスティック・ポテンシャルがその空間の基幹的な変数としてリアリティがあると見なされることは、そのようなスタイルを具備させた存在論的エレメントの不可分な構造特性であると仮定することができるだろう。

このように想定されるタイプの存在論的エレメントは「物質ではない」のだが、わたしたちの日常空間で物質に重なり、物質と「同じもの」として存在している。物質と区別されるこのような存在論的エレメントの包括的な名前は、メルロ・ポンティの後期存在論で使われた「肉：la chair」を借用するのがその性質を表現するのにふさわしいだろう。わたしたちの環境を形成している色々な「もの」が「物質」と「肉」という存在論的エレメントの二重性を有するという主張は、少々わかりにくいかも知れない。物質の一元的な存在論が習慣化した思考は、「このものは物質である」という断定的判断を論理的に乗り越えづらいのである。しかし、「もの」が「見えるもの」であり「触れられるもの」であるというように、「我」を含んだ空間の脈絡で現象することは、「もの」を物質に還元しない存在論のスタイルにも確かなリアリティを認めないわけにはいかないということになる。メルロ・ポンティの『眼と精神』が絵画論という方法を取りながら展開されていることは示唆的である。絵画がもし物質の一片にすぎないのなら、その空間的ポテンシャルなどは、ほとんど変化のしようがないからである。

THE NATURE OF ORDERは、ホリスティックな空間への物理的体系の拡張という未知な基盤を先取りすることまでを視野に入れようとしている。これは、工業生産から建築、美術、工芸に至るまでの「ものづくりの全体」を、新しい物理理論に拠準し、そのロジックの必然性に裏付けられた空間形成プロセスとして統合しようとする発想である。このような発想と「同質

な空間形成効果」を期待しながら、存在論的エレメントの二重構造という、いわば protophysicalな手法を利用して「未知の物理理論」という不確実な思想要因を置き換える試みは、そこで予見される実際的な形成効果がどのようなものかを想定しながら検証することが有効であろうと考えられる。

3. アレグザンダーにおけるメカニカル・モデルからホリスティック・モデルへの展開

3.1. メカニカル・モデルの弱点

学位論文として書かれたNOTES ON THE SYNTHESIS OF FORM (1964) から今日に至るアレグザンダーの空間形成研究の経歴は、空間構造のメカニカル・モデルからホリスティック・モデルへの推移として捉えることができる。初期の論文から常にアレグザンダーの研究を突き進めてきたのは、20世紀の人為的環境と生産品において顕著となってきた、本質的な美の欠落である。近代以降の生産品を、過去の建築や工芸品と並べてみると明らかな感性的断絶を見ることができる。このことは当然、近代的な工業的生産技術の特性から派生する制約に原因があると考えられてきた。しかし、この事態を克服しようとしたはずのモダン・デザインや、その後のポスト・モダニズムの類にしても、感性的亀裂を根本的に修復することには成功できなかった。それどころか、現代の「アート建築」云々は、工業的生産物である中性的な構造をベースにしながら、それに恣意的なデザインが結合した異様な感性的空間を生産する思考の惰性から脱却できないでいる。

わたしたちがふだん目にするこのような環境世界の在りようは、近代以来ますます強固となってきたメカニカルな世界観、つまりそれが内在させている存在論的エレメントの特性への信憑から発生した「空間の形成効果」そのものにほかならないのではないか。形成において扱われている「存在論的エレメントのタイプが何か」というような思索は、普通ほとんどの人が意識して行わないだろう。だが、多数の人間が空間形成に関わるプロセスの無意識な帰結として、或る文化、その世界観の構成素材である存在論

的エレメントのスタイルが、顕著な特性を示しつつ「空間に効果する」と予想することができるのである。

NOTES ON THE SYNTHESIS OF FORM (以下NOTESと略記) は、アレグザンダー流に煮詰め、構築したメカニカルな空間形成の数理的モデルを述べた論文だが、結局そこで組み立てた理論への反省から、爾後の理論展開がホリスティック・モデルへと進められていく道程を開いた端緒ともなっている。モダン・デザインがひとつの顧慮と反省の段階に至った1960年代の知的傾向を集約する、鋭意な論説として知られるが、アレグザンダーにとっては時代の潮流から離れる新しい道への区切りとなったのである。この論文は、空間形成のメカニカル・モデルがどのようなものかという好例を示している。同時に、その後のアレグザンダーが、そのモデルの弱点と考えるようになった主な要因を検討する材料としても有効な資料である。

空間に現れる形態 (form) は、力の相互作用 (interaction of forces) によって形成されるという考え方が、この論文の骨子となっている。自然形態の特定時点での在りようは、それに内部から、あるいは外部から作用してきた力の全てが総合された履歴であるという発想が、ここで考案されているメカニカル・モデルの本質である。自然形態では、これらの力は物理的な現実であり、原理的に計測を考慮することのできる力である。NOTESは、「力の相互作用」というメカニカル・モデルの形成原理を人為的な空間形成にまで拡大しようとする。物理的なシステムでは、力が形態に作用しているにもかかわらず、形成効果が顕現しない (たとえば変形しない) 状態は、その形態とそれが含まれる環境という相互系 (NOTESではformに対するcontextとして述べられている) にバランスまたはストレスが潜在すると考えることができる。この物理的な状態を人間が使用する空間に翻案してみると、「椅子の座面が高すぎる」とか「窓が小さくて部屋が暗く、閉塞感がある」といったストレスを、逆に「力の潜在を表現する変数」に置き換えることができると仮定するのがNOTESがとろうとしたメカニカルな拡張の方

法論なのである。

NOTESで描かれているメカニカル・モデルは、このように「多変数モデル」という特性をもつことになる。つまり、空間とそこに含まれる形態に発生していると想定される問題状況を、ストレスを表す変数 (misfit variable と呼ばれる) の集合として特定し、それらの相互作用の構造を解析することで、最も安定した空間の状態を実現しようとする形成プロセスのモデルであると言える。このモデルでは、個々の変数ができるだけ正確に特定されていて、また対処している問題状況に潜在するストレスができる限りもれなく記述されているほど、結果が的確であると考えられることになる。

NOTESのようなメカニカル・モデルでは、空間に向き合っている「わたし」が、空間の根源的な属性としての特権を中性化、無能化されてしまう傾向が生じるだろう。「我」は、力学的あるいは疑似力学的な変数の集合に分解して取り込まれ、「我」としての凝集が散逸してしまう。空間を構成する「その他のもの」との間で、多くの場合複数の「我」に関与する変数の値が平均化されてしまうような「相互作用の関係」としてだけ形跡をとどめることになるのである。実務的な面から考えると、問題状況に関与する変数を全部特定したうえで構造解析するというNOTESの数理的な方法は、確かに面倒で現実的ではない。しかし、多くの生産デザイン、建築、都市計画等の現場では、人間をいくつかの変数に還元して表現し、それらの計測可能性を根拠とした形成のロジックを組み立てるといふ、同様にメカニカルな思考方法を基盤とした形成プロセスが合理的とされている。

3.2. パターンへの転換

1971年に書かれた、NOTESペーパーバック版への序文 (preface) が、メカニカル・モデルからの転機を窺わせる資料となっている。そのなかでアレグザンダーは、ストレスや力を要素論的、分析的に特定し、それらの多変数から組み立てられる相互作用構造を解析して形態の総合 (synthesis of form) を導くプロセスを破棄することを宣言している。NOTESの疑似機械論的な「分析と総合」の発想に替わり浮上し

てきたのが、パターンの考え方であった。

空間には、NOTESで問題にしたようなストレスや力の拮抗が解消され、バランスが達成された状態が局所的には存在するだろうと想定できる。このような空間の安定した局所状態が、繰り返し観察され、タイプとして特定でき、分類できる空間の形状、または在りようがパターンである。1971年のNOTESの序文では、まだ「内在する力の相互的軋轢の解消」というような用語のスタイルを使ってパターンが説明されており、メカニカルな発想の残滓を残している。パターンの着想は、疑似力学的な要素論から空間のホリスティックな把握に至る理論展開の重要なステップである。空間に安定したパターンが存在することは、その構成要素の分析や計測等に先立って「全体として観察される現象」なのだから、空間にもっと主体的な「我」を復権させる契機にもなるはずである。

A PATTERN LANGUAGE : TOWNS, BUILDINGS, CONSTRUCTION (1977) は、室内、建築、都市デザインに関わる253種類のパターンを集めた実務的な資料文献である。この本では、空間に繰り返し起きる問題状況とその解決であるパターンを、章別に記載された「ポケット」として表現している。それぞれのポケットに含まれるのは、そのパターンの典型的な具体例の写真、その空間を構成するものや人の諸関係をスケッチしたダイアグラム、問題状況の説明文とそれを裏付ける資料やデータである。

パターンの考え方をよく示す、わかりやすい例として【159 LIGHT ON TWO SIDES OF EVERY ROOM】を参照することができるだろう。近代的な集合住宅やオフィスの居住空間に、典型的に見られる居心地の悪さの主な要因として、細長い室内の一端に大きなガラス張りの開口部が設けられている構造が挙げられる。このような空間では、外光の勾配が極端になり、もの見え方のコントラストが不自然になる。外部の光や、屋外空間との連続性が部屋のふたつの立面に作られているほうが空間の居心地が良いことは、経験的には当然理解されていることである。しかし、近代建築のメカニカルな発想様式では、建物の構造や空間配置の「合理性」

が、この経験的な知恵よりも優先されるロジックが成立してしまう場合が生じるのである。

パターン・ランゲージを用いた形成プロセスは、個々のパターンを、経験的観察や知恵を核とし、その周りに様々な研究分野から援用したデータを集積した「言葉」とみなしている。空間の形成は、問題となっている形成状況に関連すると判断された複数のパターンが有機的に連なった「統辞 (シンタクス)」として展開されることになる。上記の例では、なぜ各部屋の二面に外光があったほうが望ましいのか、という説明が人間の行動論や心理学のデータを援用して根拠づけられている。つまり、たとえば初期近代建築の設計思想では「合理的」と考えられた構造を、それとは異なる根拠を基盤とする合理性で拮抗させようとする発想があり、その意味で、「多変数間に生じる相互軋轢の解消」という、メカニカル・モデルの思考成分がまだ温存されていると言える。

パターン・ランゲージの空間形成プロセスは、メカニカル・モデルからホリスティック・モデルへの転換の過程と考えることができる。ここからさらにホリスティック・モデルを成立させるためには、空間形成に関わる判断が、ホリスティック・ポテンシャルという基本的には「単一の変数」に基づいて可能となるような、存在論的エレメントのスタイルと構造を考案する必要があると予想することができる。

4. 生きている空間

4.1. 空間に見られる生の属性とホリスティック・ポテンシャル

THE TIMELESS WAY OF BUILDING(1979)は、A PATTERN LANGUAGEと対をなす著作であり、この本ではパターンを用いた空間形成プロセスの理論的な側面が述べられている。この理論で注目されるのは、空間が有する「生: life」の属性という発想である。空間が「生きている: being alive」という着眼は、ホリスティックな空間の構造を理解する最も基本的な手がかりへと発展していく。空間のホリスティック・ポテンシャル、つまりアレグザンダー自身が使用するようになる用語である、「空間のホールネス:

wholeness=W」の度合いを表すと考えられる変数は、結局、空間の属性としての「生の構造」と密接に関係していると考えられる。

通常理解では生物と無生物に区別される諸対象で構成されている空間が、「生きている：alive」と考える発想は、言い換えれば、そのような発想を許容する存在論的エレメントの認識体系と記述体系そのものに、再帰的に根拠が求められることになる。たとえば、現代人の多くが第一義的に信憑している「物質」という存在論的エレメントの認識体系では、生物と無生物の区分が、少なくとも日常的空間の現象レベルでは比較的明瞭である。しかし、両者の現象としての境界を意図的に連続させるような存在論的エレメントの記述スタイルを構築することが可能であり、さらにそのスタイルが有する特性を、物質の特性とは異なるかたちで、空間形成に効果させることが可能である、という仮説にこの考え方はほかならないのである。

パターン・ランゲージを使った形成プロセスの方法論では、空間の「統辞単位」である個々の「パターン自体が生きている (patterns which are alive)」ことが、生きている空間を生み出す指針となる。ひとつひとつのパターンが内在させている生の度合いが大きいほど、それらが組み合わせられる空間が、全体として生きてくると考えられるのである。たとえば、【115 courtyards which live】と名付けられている建築空間のパターンがある。これは、建物の構造物に囲まれた中庭やパティオなどの空間のことだが、それらのタイプのなかにも生きているパターンと死んでいるパターンがあると考えられるのである。生きたコートヤードでは、リラックスした解放感と安堵をわたしたちは感じるが、死んでいる空間では、居心地の悪い疎外感や不安を感じるようになるのである。古い農家の中庭は生きているが、近代ビルに申しわけ程度に組み込まれた空間は、死んでいると観察されることが多いのである。このパターンの例で典型的に見られるように、或るパターンが有している生のレベルは、その空間関係の総合的な形態と、空間が「もの」として有している素材の両方に依存している。古い農家では、茅葺き屋根

や、やわらかな線を見せる木造の構造が「生きている」と感じさせるが、近代ビルではガラス、鋼材、コンクリートといった構造素材自体が空間の生のレベルを低下させる要因となっている例が少なくないのである。

「花を生ければ部屋のなかが明るくなる」、「公園の樹木や街路樹は、市街地の景観を向上させる」といった、わたしたちがあたりまえに認識している経験を、空間形成のホリスティック・モデルでは、ホリスティック・ポテンシャルという作業変数の増減として理解を試みようとしている。ホリスティック・ポテンシャルが変異する現象は、このような日常経験的な観察から簡単に推察できるのである。一般に植物、動物、人間など生きものの形態が「見えるもの、感じられるもの」として含まれている空間では、人工物だけの空間よりも、空間全体がよりいっそう生きていると感じられる。また、荒涼とした砂漠、大海原の波濤、白く巨大な南極大陸の氷塊、宇宙空間に輝く星団等々の映像を見ると、自然が生み出した形態や景観には、無生物でありながらも「生きている」と感じさせる一定のレベルが維持されていることがわかる。自然が生み出した空間のホリスティック・ポテンシャルは、増減は認められるものの、基本的には常にポジティブなレベルの域にあると想定できるのである。

4.2. 人工形態に見られるホリスティック・ポテンシャルのネガティブな変域

THE TIMELESS WAY OF BUILDINGとA PATTERN LANGUAGEの理論系列では、より生き生きとしている空間に対比される、ネガティブな空間の状況を「死んだ：dead」と表現することが多い。THE PHENOMENON OF LIFEでは、生という空間属性がポジティブな域での強弱として表現されている。後者では、空間の生の尺度であるホリスティック・ポテンシャルは、どのような空間でもゼロ以上であるという観察をしようとしているわけである。ホリスティック・ポテンシャルを、現象学的な存在論的エレメントの構造要因に読み替えた場合は、それは物理的にリアルな変数ではないのだから、空間に現象として見られる「生と死」の境界として

ゼロのレベルは、その存在論の記述スタイルとして任意に決められることになる。

ホリスティック・ポテンシャルが、空間に実在する現象として感じられる「内容としての生とその増減を示す尺度」の構造を想定する作業が、そのポテンシャルが空間形成変数として有効となるような存在論的エレメントの記述スタイルの詳細、つまり「エレメントの構造条件」を構築するための基本的な方法となる。この方法は、「我」をその属性として含むような存在論的空間において、「我を基準とした計測」として、つまり「根源的なわたし (the original mind) の観察」として進められていくことになる。

THE PHENOMENON OF LIFEでは、ホリスティック・ポテンシャルがマイナスとなるという意味での「死んだ空間」は存在しない、と仮定する論述スタイルが多く用いられるようになってきている。およそ、どのような空間も生の属性がプラスとなっているが、とりわけ自然に形成された空間では、ホリスティック・ポテンシャルが基本的にそれ以下にはならない、一定のポジティブな変域の範囲が観察されるのである。これに対比して、人為的な空間形成で根本的な問題となるのは、自然にはほとんど起こらない、相対的にネガティブなホリスティック・ポテンシャルの変域が発生してしまうことである。言うまでもなく、この現象は19世紀から20世紀以来の環境世界で顕著となってきており、現代社会が抱える主要な欠陥のひとつにまでなっている。

自然形成された空間と同様なポジティブなホリスティック・ポテンシャルの変域は、人間が創造した空間にも認められる。ポジティブなポテンシャルがとくに豊かに見られるのは、過去に造られた美しい建物や街並みだが、近代的工業の産物である現代環境では、相対的ネガティブの変域が著しく肥大している。今日の一般的通念では、このような事態は、近代的な生産方式では回避できない決定的な制約である、とあきらめられてきた。

生産された環境構造の現象としての空間がネガティブになる傾向が強い、という観察は、より根本的なレベルでは、存在論的エレメントの

変質として理解を試みなければならないだろう。すなわち、過去において創造された美しい空間と現代空間は、存在論的エレメントのレベルで観察した場合、「同じ素材で造られているのではない」と考えたほうが良さそうなのである。過去の時代に人間が空間を形成した素材は、物理的なロジックと感性的なロジックが未だ分裂していない、調和した「もの」であった。過去のほとんどの時代で「もの」は、感性的世界の素材である「肉」としての組成や成分を豊富に含んでおり、安定していた。近代的な世界構造の認識が成立していく過程のなかで初めて、「もの」からその精密で分析的な認識構造としての「物質」が派生し、空間を造る素材としての存在論的エレメントに、決定的な変質と分裂が生じてしまったのである。わたしたちが、過去の人間の遺産を見ても、「物質で制作されているに違いない」と無意識に断定してしまうのは、現代人の文化と思考習慣に染みついた「物質の同一性」を過去の空間形成素材に投影しているのにはほかならないと言える。

現代の空間形成についてしばしば指摘される「テクノロジーとアートの分離」は、存在論的エレメントを基準とした認識方法では、近代社会で「もの」が「物質」と「肉」に分離してしまい、空間を形成する素材である「もの」が存在論的エレメントの二重のスタイルとロジックで記述される、という基本認識で置き換え、根拠づけることができる。したがって、ホリスティック・ポテンシャルが空間形成効果に対して有効な変数となる存在論的エレメントであることを目標にした「肉」の構築は、近代以降決定されてしまった「もの」の存在論的二重性という脈絡を前提として、その構造条件が模索されることになる。

5. 空間形成の素材としての存在論的エレメントの構造条件

5.1. 「物質」と「肉」

近代テクノロジーがもたらした現代環境の目覚ましい空間形成効果は、「物質」にその認識基盤を変化させた「もの」に由来している。「物質」であることが顕著となった「もの」が具有

するようになった要素論的な構造認識の精密さと、その形成技術がロジックとして一貫しており、正確な空間形成効果が予測される事実に現代環境の大きな変貌は由来する、と考えることができる。その反面でテクノロジーは、「我」を確かな属性として含むホリスティックな「肉」を素材とする空間では、ネガティブなポテンシャルの変域を派生させることになってしまった。この二面性は、「同じもの、同じ空間」において、存在論的エレメントとして記述される現象の二重性として発生しているのである。

空間が見せるようになった、このような存在論的二面性は、「物質」が確立してしまった時代では、ほとんど不可逆な事態であるように思われる。空間形成への新たな提案であるホリスティック・モデルが目標とするのは、「物質」と重複する現象となってしまった「肉」の構造をよりいっそう顕著にし、原初的な「我」それ自体が空間形成の揺るぎない原点となるような統一ロジックを、未来テクノロジーの基盤として再構築することである。

存在論的エレメントとしての「肉」に求められる最も基本的な構造条件は、それを素材とする空間の本質的属性として、「我」が含まれることである。その空間のホリスティック・ポテンシャルは、「我」との相関において実在的な変数となるのである。「肉」の内部的組成で、この相関関係を取り結んでいる実質あるいは原動力こそ、アレグザンダーが「生、life」と考えている現象にはかならない。空間が「より生きている」ことと、そこに参加している属性である「わたし」がより生き生きとし、幸福であることは、ホリスティックな空間が示す単一のポテンシャルの両面にかならないのである。ホリスティックな空間と「我」は、生の度合いにおいてこのように不可分な鏡像関係を保っている。

5.2. ホリスティック・エレメント

空間形成の実際は「もの」を造ることなのだから、テクノロジーが概ね「物質」に固有な構造化の原理とロジックを基盤にして空間形成を実現しているように、わたしたちの文化では「物質」と共存し、「もの」に重なりながら存在

している存在論的エレメントとしての「肉」の側面にも、それに独特な構造条件や構造原理が発見されるはずである。つまり、「肉」という素材で仕立てられ、「肉」の全体性として実現するホリスティックな空間を組み立てている「構造単位としてのエレメント」は何か、を特定する研究が先ず試みられなくてはならないのである。

ホリスティックな空間の構造を組み立てている単位あるいは要素を、「ホリスティック・エレメント」という用語で総称してみよう。この論説の文脈で、用語が重なることになってしまうが、「存在論的エレメント」は、現代文化では概ね「物質」か「肉」のどちらかであって、世界を構成する素材の現象学的なスタイルの差異を包括的に表現する用語である。これに対し、「ホリスティック・エレメント」とは、「我」を含むホリスティックな空間の素材である「肉」の単位的な纏まりやディテールを表現する構造的要素という意味である。ホリスティック・エレメントは、簡単に説明すると「感じられる世界のなかに在る感じられるもの」、つまり「見たり、触れたりできるもの」であるといえる。さらに、「感じられるものに近接して感じられるようになる、そのもののディテール」であるともいえる。したがって、ホリスティック・エレメントは、「形態、フォルム、ゲシュタルト」などと類義概念ではあるが、「我」を含む空間の構造要素として、「我」と本質的な相関関係を結んでいなくてはならない。また、「我」が「もの」に接近して感じられるディテールには限界があるので、原子、分子、細胞などは、直接的にはホリスティック・エレメントとして顕現していないと考えることができる。

5.3. センターと感核

THE PHENOMENON OF LIFEでは、ホリスティック・エレメントの構造原理を把握するひとつの方法として「センター:center」と呼ばれる理論が展開されている。アレグザンダーの考えによればセンターとは、「感じられるもの」を構成するゲシュタルトの場(field)であり、空間の「点」ではないが、「我」の意識がそこに向けられる「中心とベクトル」としての構造

をもっている。空間に実在し、感じられる具象であるセンターは、それ以外のセンターによってのみ説明でき、定義することができる。つまりセンターは、そのディテールとしての、よりスケールの小さなセンターが集積し、重なり合った「全体性：wholeness」としての構造をもっている。そして同時に、それ自体がさらにスケールの大きな「全体性」であるセンターのディテールとして存在しているのである。

センターは、空間が宿している生の源泉であり、センター自体が生との度合いを有している。空間のホリスティック・ポテンシャルは、したがって、空間を全体性として構成するローカルな場としてのホリスティック・エレメント自体に内在する生の構造と、それらのローカルな場同士が相互関係として結び合っ出来る脈絡構造（パターン）から派生する生の構造とが累積的に示している生の密度である、と予想されるのである。

センターは、感じられる世界に「我」が志向的に在るときに、その感性の「導体あるいは受容体」となるような「中心性を有する場」としての具象なのだから、この試論では「感核」という用語で対応させることにする。ただし、アレグザンダーが論じているセンターは、必ずしも感じられる空間素材である「肉」を構成するホリスティック・エレメントに限定されない場合がある。アレグザンダーの論述法は、存在論的エレメントの二重性というスタイルではなく、拡張した自然科学の統一的对象としてホリスティック・エレメントを視野に入れようとしているので、分子レベルでの形態構造までもがセンターの実例として引き合いに出されている場合がある。しかし、生きている空間を形成し、そこに効果させる要因としてのホリスティック・エレメントの構造理解は、物質論的に見えるような例であっても、図式や写真を使うことで感じられる世界の素材へと質的に置換されている、と考えることもできる。存在論的エレメントの使い分けに由来するこのようなニュアンスの差異を留意したうえで、この論説では「感核」をセンターの訳語として使用することにする。

5.4. ホリスティックな空間の構造的要素としての感核場

普通わたしたちが「もの」として感じている空間の部位は、全て感核＝センターとしての構造をもっている。感核が単独で、完全に自律的に存在することはない。感核は、「もの」のディテールとしての内部構造と、「もの」が空間のなかに織り込まれることで発生する脈絡（コンテキスト）としての外部構造によって、常に相互的な位置づけをもつことになる。ディテールと脈絡は、それら自体が空間部位の感性的凝集であり、感核である。感じられる空間の全体性は、このように、あらゆるスケールの感核が連携し合い、重なり合った「場」、つまり「感核場：the field of centers」としての構造記述を利用して解明できることになる。

ホリスティックな空間の基本属性である「我」が感核場の志向的原点となり、感核場と連動することで、空間生命の尺度であるホリスティック・ポテンシャルが実在的な変数として取り扱えるようになる。ホリスティックな空間形成とは、ホリスティック・ポテンシャルの増加を形成効果として実現させる作業にほかならない。ホリスティック・モデルを構築する手順として、次の作業項目に区分して、感核と感核場にホリスティック・ポテンシャルが発生してくる仕組みを考察してみる必要がある。

- 1 相対的に個別の単位あるいは部位として捉えた感核とその内部構造：もの、ローカルな空間のかたち、それらのディテールとしてのゲシュタルトなど。
- 2 感核場に見られる連動構造：感核が相互にホリスティック・ポテンシャルを補強し合う「助け合い」の現象、逆にネガティブな感核がホリスティック・ポテンシャルの低下作用をもたらす現象など。
- 3 感核及び感核場と「我」との連動構造。

6. 感核と感核場のプロパティ

6.1. 空間に現象として生起する「生」の因子

THE PHENOMENON OF LIFE (2003) では、感じられる空間を造る素材・要素である感核（センター）の属性（プロパティ）が詳細に検

討されていて、この理論展開が本書の特徴となっている。A PATTERN LANGUAGE (1977) と THE TIMELESS WAY OF BUILDING (1979) の理論系では、空間を組み立てている単位が、まだパターンとして捉えられていた。パターンは、関係性の構造であっても、実体としての「もの」ではない。パターンの理論系では、「生きているパターン」と、その内部構造的な「生地」との関係性を明らかにする作業が課題として残されていた。この四半世紀の間にアレグザンダーの思想は、空間の関係構造から、具象的に感じられる「もの」へと深化していったと考えることができる。空間が示す生命の強さであるホリスティック・ポテンシャルを特定するには、空間の関係構造だけを見ていたのでは不十分で、空間の具体的構成素材である感核レベルの属性として、ホリスティックな生命の発生原理を見極めなくてはならない。「パターンが生きている」と言えるのは、その構造因子となっている感核と感核場が生きているからにほかならない。

THE PHENOMENON OF LIFEでアレグザンダーは、感核の基本属性(fundamental properties)を15種類の類型に分類している。ところで注意しなくてはならないことは、感核と感核場は、視点によって変化する相対的区分である、という点である。たとえば、花は一個の「もの」として感核だが、花卉、花柱、萼など相対的にスケールの小さな感核から構成される感核場でもある。花を微視的に観察すれば、これらの部分的組織もまた感核場となっていることがわかる。アレグザンダーの15類型は、上で述べた作業項目の1か2に対応しているが、「もの」を見る視点によって、この区分が重なったり、変換したりする場合がある。2の作業項目に相当する類型がとくに意味をもつのは、感核がそれ自体とは明らかに区分できる「環境あるいは脈絡」との関係で発生する感核属性のタイプにおいてである。

6.2. アレグザンダーの分類による15種類の感核属性

感核属性(property)とは、その感核が生命を感じさせるときの、感核の形態的、構造的な特徴をタイプに分類したものである。つまり感

核から生じるホリスティック・ポテンシャルの大きさと、感核の特定できる形態的、構造的属性とを相関させる分類法である。アレグザンダーが感核属性の類型化を研究するために用いた方法は、次のようなものである。ふたつの「もの」(すなわち感核または感核場)を並べて観察し、そのどちらが「より生きている」と感じられるかを判定する。「より生きている」と感じられた方の「もの」にはあって、他方には不足している形態的特徴を特定し、その一般的な記述法を編み出す方法である。空間を構成するあらゆる部分や要素がこのような観察の対象となりうる。おおよそ同一スケールの「同じ種類のもの」なら何でも「ふたつのもの：pairs of things」の候補となるが、この研究方法では写真も活用されている。都市景観、自然景観、建築、家、室内空間、造作、家具、工業製品、工芸品、芸術作品、自然形態などから比較的近似したスケールの「もののペア」が選ばれ、両者を比較したときのホリスティック・ポテンシャルの相対的強さと形態特徴の相関が検討される。ここで注目すべきことは、多数の人が参加したテストの観察結果から平均を求めようとする統計的方法を、アレグザンダーが積極的に排除していることである。アレグザンダーが目標としているのは、感核から発生するホリスティック・ポテンシャルを量る比較テストを長年にわたって積み重ねることで、「個人であるわたし」が空間の属性として存在することの標準を獲得し、「根源我」を開発することである。

6.3. 空間の親和性

15の感核属性の中心として全体を統括している概念は、最後に述べられている not-separateness であろう。感核基本属性のこれ以外のいくつかは、この概念のより具体的な形態記述表現(形態属性を表現する言葉)のヴァリエーションであり、その下位属性であると考えられることができる。not-separatenessは、感核を取り巻く周囲の空間、あるいは脈絡環境としての感核場、と感核との「親和性」を表現している。わたしたちの日常経験で、世界が見せる親和性(connectedness to the world)を簡単に観察できるのは、たとえば樹木の葉や草木など

においてである。風にリズムカルに揺らぐ木の葉や、わずかな空地に繁り、彩りを添えている草花は、空間との顕著な一体感があり、空間に包容されているような肉感的な同化を感じさせる。わたしたちが、「個人であるわたし」の特化意識を停止するように努力して、このような親和的感核場と謙虚に交流しようとするなら、空間がまさに生きていて、「我」が空間からまったく疎外されていないホリスティックな生の属性であるという境地に達することは、それほど困難なことではない。自然形成された空間は、無生物であっても多かれ少なかれ世界の親和性という属性を完備している。むしろ自然形成された空間には、親和性が揺らぎ、途切れる「ノイズ」がほとんど発生しない。not-separatenessが相対的ネガティブとなるseparatenessとは、人工的空間にのみ発生する特有な疎外感である。

人工空間にあっても感核相互の断絶、途切れを発生させない感核場の連属性が親和性を支えている。ホリスティック・ポテンシャルが相対的ネガティブにならないように感核場が連携し、働き合う感核の属性を「空間親和属性」と考えることができる。人工的空間形成で、ホリスティック・ポテンシャルを、自然形成が保持しているポジティブレベルの範囲以下に低下させないためには、何より空間形態が「世界との一体：one with the world」から逸脱し、「空間疎外」を派生させない構造的な特性を備えていることが最重要な条件となる。そのような空間形態に必要な組成あるいは成分が、空間親和属性のカテゴリーに含まれる感核属性にほかならないことになる。

アレグザンダーが述べている15の基本感核属性を検討してみると、ほとんどが空間親和的な特性を示しており、したがってnot-separatenessのより具象的な構造成分であることがわかる。たとえば、1番目のlevels of scaleは、空間で連携している感核相互の物理的な大きさ自体に飛躍的な差異があってはならないことを指示する感核場の条件である。現代の工業製品や構築物では、形態を構成する感核のスケールにレベルの断絶がしばしば見られる。近代デザインが「余分な装飾」あるいは「形態的な不均質」

として排除した感核場の構造が、伝統的な建築や工芸品では、感核スケールの自然な諧調を生み出す要因として働いていた。近代デザインと近代建築では、ディテールから上部構造へと感核スケールが不連続にジャンプする傾向が観察され、それが空間親和性を阻害する形態特性のひとつの要因となっている。

6.4. 境界を形成する感核場と強い感核

感核場の内部構造には、それを構成している感核相互の境界面または境界場が存在する。また同様に、一個の「もの」として見た感核場には、それを取り巻く空間あるいはその内部構造との境界面あるいは境界場が存在する。感核場の境界構造に作用し、その一端となって現れる感核属性は、空間親和性の直接的な担い手であると考えられる。世界と一体であるように「もの」が存在するには、それが環境空間と内部構造との双方に向かって親和し、浸透し合う境界構造の形態的特性が必要となるからである。アレグザンダーが論じている感核属性の分類では、3 boundaries; 5 positive space; 8 deep interlock and ambiguity; 9 contrast; 10 gradients; 11 roughnessなどが境界構造に作用する感核カテゴリーに所属していると思われる。

感核と環境空間との境界面で起こる親和的接触や相互浸透ばかりでなく、距離や間隙で隔たった感核同士が共鳴し、響き合うことで空間全体の親和的構造が生起することも観察できるだろう。4 alternating repetition; 7 local symmetries; 12 echoesなどの感核属性がこのような親和構造を生み出す形態要因として挙げられている。

また感核の中には、それ自体が相対的に高いホリスティック・ポテンシャルを有していて、それが含まれる感核場や全体空間を統率し、中心性や凝集力のベクトルを発生させる能力が観察できるタイプがある。アレグザンダーの分類では、2 strong centers; 6 good shape; 13 the void; 14 simplicity and inner calmなどがそれにあたる。樹木を例にとると、花や果実、あるいは紅葉などが「強い感核：strong centers」として働き、感核場としてのその樹木と環境空間全体のホリスティック・ポテンシャル



図2 ふたつの作品写真を用いた「我の鏡像テスト」。**[左]** ジョン・メイクピース、オリエンタル・キャビネット、1980年代。**[右]** シェーカー・カップボード、19世紀前半。

ルを増加させることが観察できる。

感じられる存在論的エレメントである「肉」を組成とするホリスティックな空間では、このように感核場のいくつかの属性が補強し合って親和的構造を発生させ、また強い感核によって凝集性を与えられる。感核場の全体的な連なりをひとつの「場」として考えた場合、そのある部位（local）における感核場の強さ（ホリスティック・ポテンシャルの高さ）が、空間全体のホリスティック・ポテンシャルに作用し、連動的にそれを増加させる。このような場の機能が物質論的な力場等とは異なる、ホリスティックな空間独特の構造特性であることをアレグザンダーは指摘している。

7. ホリスティックな空間の属性としての「我」

7.1. 「我」の鏡像としての空間

アレグザンダーが提唱しようとしているホリスティック・モデルは、ホリスティック・エレメントとしての感核場の構造を、感核場の特性を表現する言葉の統辞構造からアプローチしようとする空間形成手法である、と予想することができる。感核と感核場のベーシックなホリス

ティック・ポテンシャル要因である空間親和性が、空間の基本属性である「我」と構造的に連帯していなければホリスティック・モデルは機能しないだろう。したがって、共有化される言葉（感核属性を構造化し、共有する語彙と統辞法）を発展させる前段階として「我」自体において可能な空間親和的構造（「我」が空間に所属する親和的な在りよう）を開発することがホリスティック・モデルを構築し、実践する条件となるし、実際的には最重要な根本課題となる。

それぞれの個人において「我」は実在しているのだろうが、親和性の指標となるのは「個として特化した我」ではなく、空間自体の主体性を反映するように、空間親和能力を開発された根源我としての観察者であり、実践者である。わたしたちの現代文化では、「個として特化した我」を空間形成の主導者または表現者とする文化的趨勢が根強いから、根源我の連帯を通じて実践されるホリスティックな空間形成は、文化の基本的発想を構造転換するところにまで関与した方法論でもある。

根源我（the original mind）は、訓練によって養成される能力である。それは、生涯にわた

る観察と判断の積み重ねとして育成される自我のひとつの水準であると言える。長年にわたる芸術鑑賞の習慣から修得される知見や感性の深化に共通しているけれども、芸術作品として特定され、分別された世界部分だけではなく、根源我は感じられる世界の全体性、そのあらゆる組成に関与しようとする判断能力である。このような訓練は、言語的に分節された世界の差別的・記号的構造に先立つ「名付けられない質」への共感と判断を優先しなくてはならないが、同時に、判断を重ねるプロセスからホリスティックな感核属性を同定させ、共有化させる語彙が分節してくるとも考えることができる。

アレグザンダーは、このような訓練のひとつのメソッドとして「私の鏡像テスト, the mirror of the self test」を提案している。これは、感核属性の分類と同じ方法で、ふたつの「もの」あるいは空間部分を比較して、どちらが「私の鏡像」と呼ぶのによりふさわしいかを自問する方法である。あるいは「もし生まれ変わるなら、そのふたつの観察対象のうちどちらを選択するか」を、概念化したイメージや文化的干渉を意識的に排除しながら判定する訓練方法である。

【図2】

7.2. 空間の主体性

多くの言語では、感じられる世界を受動態で語る習慣を固定化させてしまっているように思われる。人間は身体を世界に貸与することで行動し、空間を変え、形成する。この平常的な行動と思考の習慣では、世界が「見られるもの」の側に固定されていて、見られている世界の立場から「見られる動作」を能動的に語る動詞は、平常な言葉の使用では必要ないからだろう。しかし、このような言葉の習慣的制約、あるいはそこから派生する、空間を感じている「我」に能動的優位があると臆断するような錯覚が、ホリスティックな空間構造への「我」の帰属や鏡像関係を発想する脈絡では文化的障壁となりうるのである。ホリスティックな空間は、「感じられる対象」であるというより、「感じられる主体性を有した構造」であると考えたほうが、その形成論的な構造記述がいっそう生き生きとした、破綻の少ないスタイルとなる。空間を

「我」が見たり、感じたりでき、その親和的構造を量ることができるのは、空間と「我」との相互主体的な連帯に基づいてである。

7.3. 相互主体的バランスの喪失と空間親和性の阻害

近代文化の発達ともななって多重的に進行したいくつかの大きな変革は、空間親和性の阻害が現代環境において顕著となった基本要因にほかならない。「もの」から「物質」が分岐するプロセスは、その一面で近代的工業とテクノロジーを育む運動の母体となった。だがその反面で、精密化され続ける物質論の認識は、人間までもその図式に取り込み、その型に納めようとする。「もの」と呼ばれた包括的図式のなかで、「物質」が精密な構造記述として文化的に肥大することに反比例するように、「もの」の半身である感じられる「肉」が陰のように見づらくなり、その独自のスタイルで描出される「肉自体の客観的構造」が不鮮明となってしまった。物質論から派生する、分離し、独立した「我」としての個人のイメージが、物質論の世界と並置されて見られるようになった結果、空間と「我」との相互主体的な絆が変質し、「我」は空間の主体性から遊離してしまいがちとなった。現代文化が陥っているこのような事態は、人間の自由どころか、存在が劣化した分裂でさえある。テクノロジーという強力な形成手段を手に入れ、一見自由となったように見える現代人は、「個人の価値が多様化した」幻影に悩まされている。本当のところは、空間の主体性に根付いている価値がむやみに「多様化する」道理などあるはずもなく、空間母胎との絆を喪失した眩暈と幻視なのではないだろうか。

空間との相互主体性から遊離した「我」が自我として特化することが、「存在の非分裂」としての平常な親和的連帯や鏡像関係のバランスを圧迫し、その機能不全を促進させることになる。遊離した「我」の集合的趨勢が匿名的自我となって物質論的文化に宿り、空間を物質論的な操作の対象に変えてしまう。他方その陰で、「物質」の余剰に化身した「肉」は、本来の構造的脈絡を見失なわれ、デカダントな恣意的表現の素材として翻弄されてしまうことになる。

現代環境に求められる方向性として、しばしばテクノロジーとアートの協調や融合などと言うことが喧伝されるが、現代文化が備えるに至ったこれらの形成論的両面性が等しく特化的自我の相関となっている限り、その両面システムが空間親和性の阻害要因として相乗的に働き、ホリスティック・ポテンシャルの相対的ネガティブな空間領域が生産され続けてしまうことになるだろう。

8. まとめ：形成論の基盤としての存在論の役割

空間形成の基盤となるのは、形成される世界構造を記述する方式と、世界構造が蓄えている価値である生の増減を表現する変数である。近代以来の形成文化では、世界構造を記述するスタイルが物質論に偏り、そこに統合されてしまう趨勢が顕著となった。物質論的な世界構造の記述スタイルは、テクノロジーの目覚ましい発展をもたらせた。この進展は人間環境を劇的に変貌させたが、その反面で空間疎外という本質的な問題を発生させることとなってしまった。物質論的な世界記述スタイルが抱えている本質的な弱点は、空間構造の基本属性としての「我」と「価値」を明確で直裁な実体として取り扱うことが困難なところにある。「我」と「価値」は、物質論を拡張した形成に関与する諸学の脈絡で、その他の変数とともに並置され、錯綜した多変数の総合に紛れてしまった。「我」と「価値」はこのような文化状況では、空間形成の単純で強い誘導力として機能するポテンシャルを喪失する。

人間の実践的営為である空間形成に対して、「存在論」に課せられている現代的な役割は、物質論をその能力部分として統括できるような世界構造記述の新しい枠組みを構築し、「我」と「価値」が連動する「根源我」を形成文化の能動的中心に据えることで、ホリスティックな空間形成の原動力となる新世代テクノロジーへの理念的な道を模索することである。20世紀の物質論は、ひたすら物質のより精細な構造記述を探求し、テクノロジーは物質的世界の精密な加工と構造化を求めた。これらの成果は確かに有益ではあったのかも知れないが、この急激

な加速が何を目標としているのかは、定かではない。物質の文化的な陰のようになった「感じられる世界素材」の乖離と混乱が、恣意的なアートや環境造形の氾濫を生み出した。このような行き方は無制限に続けられることではないだろうから、空間形成の新しいモデルを模索する作業では、存在論的な反省が不可欠な基盤となるだろう。

ホリスティックな空間形成のプロセスは、空間を操作対象とみなし、個人の意図を一方的に反映させる限りでのデザインや造形的行為ではありえない。人間が「根源我」として空間との相互主体的連帯をもう一度取り戻し、その連帯構造を謙虚に理解するところから世界を発芽させ、熟成させるような空間形成プロセスを発見することが求められるのである。

文献

Christopher Alexander, THE NATURE OF ORDER, BOOK ONE, THE PHENOMENON OF LIFE, The Center for Environmental Structure, 2003.

Christopher Alexander, THE NATURE OF ORDER, BOOK TWO, THE PROCESS OF CREATING LIFE, The Center for Environmental Structure, 2003.

Christopher Alexander, NOTES ON THE SYNTHESIS OF FORM, Harvard University Press, 1964.

Christopher Alexander et al., A PATTERN LANGUAGE: TOWNS • BUILDINGS • CONSTRUCTION, Oxford University Press, 1977.

Christopher Alexander, THE TIMELESS WAY OF BUILDING, Oxford University Press, 1979.

図版出典

図1 筆者撮影

図2左 Jeremy Myerson, MAKEPEACE: A SPIRIT OF ADVENTURE IN CRAFT AND DESIGN, Conran Octopus, 1995.

図2右 John Kassay, THE BOOK OF SHAKER FURNITURE, The University of Massachusetts Press, 1980.

